

提言

「青春はこれから」 定時制高校の教室から

私はいつの頃からか定時制高校に憧れていた。

私の父は1931（昭和6）

年生まれで、「戦争に」早く行きたかった」と言っていたのを覚えている。農村の小さな集落に一発だけ落とされた爆弾で家が焼かれた後、すぐに敗戦。戦後の混乱の中で、父も混乱していたらしい。「（戦後）5年間ケンカばかりしていた」と言っていた。その後、定時制高校に入り、大学に行き、小学校の教員となるのだが、大学入学の頃は、「あやつが大学に行って何になる」とバカにされていたらしい。生きている間中荒々しい父親だったが、ケンカに明け暮れていた少年が大学進学を志すようになる高校生活って、どんな感じだったんだろうと気になっていった。また「同和」教育と出会い、あんまり関わりたくなかった父親のことを振り返る時間が増え、「いつか定時制に行きたい



湧心館高等学校定時制

浦田 敏啓 さん

なあ」と思うようになっていた。昨年度、湧心館高校定時制（湧心）に赴任した。

夕方の5時、給食で1日の幕が閉く。服装検査もなく穏やかに授業がはじまる。4年生の二人のクラスで父親のことも含めて自己紹介をした。Mが「みんな優しくとてもいい学校ですよ」と言ってくれた。その時間に書いてもらった自己紹介の中に彼は「うまれてはじめて学校が楽しいと思っています」と書いていた。

ある日、少し早めに教室に行くとMが一人で机に突っ伏していた。私に気づくと、少し慌て

た感じでこちらを振り向き「おつかれさんです」と言った。私も「おつかれさん」と返すと、「仕事の癖で、おつかれさんって言っちゃうんです」と少し笑った。国語の授業は1限目で、二人とも働いていて1限終了後の補食の時間に給食を食べることが多いのだが、時々5時に間に合うことがある。そんな日はてきめんである。働いてきて食事を取れば、眠くなる。時々顔を洗いにいったりしながら、勉強を続ける。

定通（定時制通信制）体育大会の前に集中的に部活動の時間が組まれる。二人ともバドミントン部で、Tは買ったばかりのラケットを見せてくれた。Mは太鼓部にも入ったばかりで、「もっと早く入っとけばよかった」と言っていた。またあるとき、作文の途中

で「先生、悩みがあるときはどうしたらいいんですか？」と聞いてきた。何のことだろうと思って「何か悩みがあるの？」と尋ねると、少し話をしてくれた。上手いアドバイスも思いつかないまま「日記とかいいみたい」と言ったら「日記書かないんですよ」と言う。「なら、人に話したりとか、とにかくことばで表現してみると、自分の気持ちとかはつきりして、スーッとすまいたい」と続けると、Tが「俺が聞いてやるよ」と言って笑った。Mの話がさらに具体的にになっていった。Mはしかし「これでもすいぶんよくなった。以前は上手く行かないことばばかりで人間関係つくるのが嫌で、ゲームばかりしていた」と言う。するとTが「おれは逆かな。昔は何も考えんではしゃいでいたけど、中学の頃からそうできなくなかった」として「悩んだときは泣ける映画がいいよ」と

言って「I am Sam」を紹介した。授業が終わり、Mが「今日はかなり楽になりました」と言ってくれたが、授業の度に私の方が楽になっていると思った。Mは授業で「僕は学校が好きだ。でも昔からじゃない。」にはじまり「くいのないよう思い出をつくっていいこうと決めた。」で終わる詩を作った。タイトルは「青春はこれから」。その後、彼は、これまでと今、これからを見つめ、生活体験作文を綴り校内で発表した。Tも時々自作の詩を見せてくれたりしながら、卒業文集に自分のことばをまとめていった。

県的生活体験発表会が行われる定通文化大会は今年で69回目になる。はじまった頃、私の父もそこにいたのかも知れない。誰もがいろんな体験をした時代の定時制高校で、父は何を見つめ、綴り、語ったのか。時々、いろんな体験をして入学してくる今の湧定の生徒たちに、私の知らない父の高校生活を教えてもらっているような気がする。